

「全人類皆殺し大作戦-前編-」

—初稿—

2025/5/7

脚本 太郎

〈人物表〉

春野 紡	(15)	中学三年生
霧崎 宴	(15)	中学三年生。殺人犯
島田 凜	(15)	中学三年生
高城 充	(45)	霧崎母の内縁の夫

校舎裏（夕）

雨による水溜りがチラホラある。

リュックの中身がぶちまけられている。

春野紡（15）、落ちている泥だらけのノート類を、一つずつ拾ってはタオルで拭い、リュックにしまっている。

春野、苛々した様子で、しきりに何かを呟いたり舌打ちしたり地面を足で踏み叩いたりしている。

猫の鳴き声。

校舎の壁に寄りかかるように猫がまどろんでいる。

春野、卑屈な笑いを浮かべる。

近くに落ちていた掌ほどのサイズの石を拾い、

春野 「蹴らせろ」

猫に近付いていく。

直後、上空から霧崎宴（15）の声。

霧崎の声「あ、やば」

春野、ビクッとして立ち止まる。

春野の足元のアスファルトに島田凜（14）が頭から落下する。激突音。

春野、さらにビクッとして石を落とす。

血がアスファルトに広がっていく。

猫が逃げていく。

春野、二階を見上げる。

霧崎、二階の窓から顔をのぞかせている。

霧崎 「誰かと思えば三組のいじめられっ子担当の春野くん」

春野 「そう言う君は二組のいじめられっ子担当の霧崎さん」

霧崎 「こんな時間までいじめの後片付けとは大変ですね」

春野 「そっちこそよく分からんけど大変そうな状況だね」

霧崎、ハッとして、

霧崎 「あそうだ、今の見てた？」

春野 「さすがに見てないとは言い難いかな」

霧崎 「あちゃちゃ。てか二階から突き落としただけで人って死ぬんだね。意外」

春野、困ったように島田の死体を見て、

街・路地裏（夕）

春野 「そりや頭からアスファルトに落ちればね」

霧崎 「うわ脳味噌出てんじやんぐつろ。でも勉強になったな」

春野 「随分高い勉強代が付きそうだけど」

霧崎、春野を伺うように見ている。

霧崎 「誰かに言う？」

春野、目を逸らす。

春野 「い、言わないよ」

霧崎、疑わし気な視線を春野に向ける。

やがて制服のポケットからナイフを取り出す。

一瞬の沈黙。

霧崎、ナイフの柄を口に咥え、窓枠を乗り越える。

春野、振り向いて全力で逃げる。

霧崎、窓枠に両手でぶら下がる。

手を離して落下。島田の死体の上に着地。骨の砕ける音。

ナイフを右手に持ち、全速力で春野を追っていく。

春野、壁に両手をついて直立不動。霧崎はその後ろに立ち、ナイフを春野の首筋に突き付けている。

霧崎 「ほんじゃ」

霧崎、ナイフを僅かに振りかぶる。

春野 「いやストップストップ」

霧崎 「いや青春の日々に立ち止まってる暇なんてないっつか」

春野 「青春というにはあまりに血生臭すぎるって。頼むから殺さないで」

霧崎 「残念ながら目撃者は消すっつーのが有史以来恒例のルールなんですな」

春野 「そんなあ」

霧崎 「でもまあ可哀そうだし、辞世の句詠む時間くらいはあげても良いよ」

霧崎、ナイフの位置を戻す。

春野 「いや詠まないよそんなの。それよりぼくの話聞いて。（早口に）良いかい？ 第一に二人殺せば罪の重さも跳

ね上がる。第二にぼくが君を告発するメリットはないし
たがって他言無用上等。第三に日本のお巡りさんは優秀
だからどうせすぐバレる。OK？」

霧崎、キョトンとした顔。

霧崎 「……え何、今のが辞世の句？」

春野 「詠んでない詠んでない！ 詠んでたとしたら字余りすぎ
だろ」

霧崎、先ほどより大きくナイフを振りかぶる。

霧崎 「じゃ改めて、斬首行きます」

春野 「いや首落とすつもりなのかよナイフじゃ絶対不可能だっ
て」

霧崎 「吾輩の辞書に落とすという言葉はない」

春野 「じゃあその辞書ただ落丁してるだけだってえ」

霧崎がナイフを振り下ろす。

春野、目を瞑って絶叫。

数秒後、恐る恐る目を開ける。

ナイフは彼の首筋スレスレで止まっている。

霧崎 「と言いたいところなんだけど……まあ君はわたしと近い
境遇だし？ 共犯になってくれるなら生かしといてあげ
ても良いよ」

春野 「共犯って……もしかしてまだ誰か殺す気？」

霧崎 「イエス」

春野 「具体的に誰を？」

霧崎 「誰っていうか……まあ、全員」

春野 「は？」

霧崎 「全人類皆殺し大作戦っつか」

春野、しばし言葉に困る。

春野 「なんか、君がいじめられてる理由の一端が見えた気がするよ」

霧崎がナイフを振りかぶる。

春野 「うわ嘘嘘、参加させていただきますその大作戦」

霧崎、ナイフをピタリと止める。

嬉しそうな笑顔でナイフを仕舞う。

霧崎 「本当？ 良かった。わたし一人でもできるだろうけど、

二人いた方が何かと便利だもんね」

春野、振り返りながら、

春野 「まあ正直、二人でも絶対不可能だと思うけど」

霧崎 「吾輩の辞書に正直という言葉はない」

春野 「その辞書捨てた方が良いよ」

3. アパート・外観（夕）

ボロボロの二階建てアパート。

高城の声 「てめえこれ箱ちよつと凹んでんじゃねえかぶち殺して豚に食わすぞ下痢人間がああ！」

配達員の声 「ひいひい！」

4. アパート・二階・霧崎家の部屋の玄関前（夕）

高城充（45）と荷物を持った配達員が向かい合って立っている。

少し離れた場所にドン引きした顔の春野と呆れた顔の霧崎が立っている。

高城 「てめえみたいのが何で社会に出てきちゃったんだよ？

何で学生のうちに自殺しておかなかった？ そこまで何にもできないっててめえもう無能のアイデアか人間に化けた猿の糞かどっちかだろ？ どっちだよ！ どっちだつて訊いてんだろ答えろおお！」

配達員 「ひいひい！ 凄い勢いだあ！ あなたモラハラのアイデアですかあ？」

高城 「俺はモラハラのアイデアだよお！」

配達員 「モラハラのアイデアだったあ！ プラトンもびっくりだあ！ 初日から凄い家に当たってしまったあ！」

高城、苛ついた顔で舌打ち。

高城 「あーもういいや、こんな奴に構ってる暇ねーよこっちは忙しいんだから」

高城、配達員から荷物をひったくる。

振り返って玄関ドアを開ける。

高城 「今日中に辞めるか自殺しとけよ、この顔面アナル野郎！」
配達員 「ひいひい！ それどういう文化圏に属する悪口なんです

